

ルネサンス研究所 ニューズレター

2011年 0号

2011年1月28日

【目次】

- 報告 ○12.12 シンポジウム
- 第一回運営委員会の決定事項

発行 ルネサンス研究所

〒101-0065

東京都千代田区西神田 3-1-2 ウインド西神田ビル 502

メールアドレス <mailto:renesansken@gmail.com>

研究所ブログ <http://renaissanceken.blog106.fc2.com/>

——ルネサンス研究所がスタート——

歴史的転換期における文化・思想運動の新たな潮流をめざして

明大シンポに 110 名参加、熱気あふれる討論

12月12日午後1時から明治大学において、「ルネサンス研究所が提起するもの」と題して、4時間にわたるシンポを開催。110名参加（発起人18名、賛同人42名、当日参加者50名）で、98人定員の教室に立ち見の人が出るほどの盛況であった。

発起人を代表して古賀暹が開会挨拶・準備経過を報告した。そしてトップバッターに、市田良彦から「共産主義」をキーワードとする熱烈な問題提起がなされた。これを受けて、川上徹、新開純也、太田昌國による討論スターターの発言が行われた。3人とも50年にわたる自らの社会・政治運動体験に基づき、それぞれの立場から市田提案への意見とルネ研の方向性をめぐって問題提起がなされた（各発言者の発言内容は、近く刊行される「ニューズレター」創刊号に掲載）。

討論に入り、司会を表三郎に代わる。伊藤誠、矢部四郎、菅孝行をはじめ、多数の参加者からルネサンス研究所（以下、ルネ研）への期待、疑問、提案が出された。

6時から会場を近くの「祭」に移し、懇親会を開催。60名を超える参加があり、まるで「祭の準備」をするがごとく、さまざまな人びとの間で熱気あふれる交流が行われた。最後はインター合唱で閉会した。

第一回運営委員会で活動方針を決定

——賛同人は研究所員として登録

12・13発起人会議、1・22第一回運営委員会が開催され、具体的な活動方針を討議、以下のように決定された。

① 発起人は全員、運営委員になりルネ研の運営に携わる。

運営委員：新開純也 古賀暹 多田康男 井出彰 表三郎 川上徹
松田健二 山崎耕一郎 下山保 大下敦史 菅孝行
長原豊 八木健彦 太田昌國 榎原均 市田良彦
崎山政毅 後藤元 伊吹浩一 榊本純（順不同、20名）

*運営委員会には研究所員は自由に参加できます。

② 賛同人は「研究所員」としてルネ研に登録される。

***賛同人の方をお願い…このことに不同意な方は事務局までご連絡ください。**

研究所員はそれぞれ自立的に個別研究会を立ち上げる。また、既存の研究会をルネ研と連携する。必ずしもルネ研と名乗る必要はない。こうした多様な研究会の動向を「ニューズレター」で全員に発信し、新たな文化・思想運動のネットワークを目指す。

③ 運営委員会が主催する研究会＝基幹研究会とする。

<首都圏>・プランニングメンバー

…菅、太田、川上、長原、榊本、八木

・2月中にプランを確定

- ・基軸 1.市田提起と3報告を踏まえる。
2.現代（世界史の中の日本）という視座
3.世界史としての近代（コロンブス以後）の検証

＜関西＞ ・1～2回を予定。1月29日の運営委員会で討議。
・関西のメンバーは現在20名程度だが、50名を目途とする。

④ 首都圏と関西に事務局が設置された。メンバーは以下のとおり。

＜首都圏＞ 松田（代表）、流、森田、原、多夢

＜関西＞ 榎原（代表）、崎山、後藤、物江

⑤ 今後の課題

- 1.ルネ研WEBサイト開設。夏をめどに立ち上げる。
「ルネ研電子化戦略プロジェクト」を準備する（榎本提案）。
- 2.広く呼びかけるシンポジウムについては、各研究会の動向を見ながら討議企画する。

*次回運営委員会

- ・2月26日(土)18:00～ 於：ひまわり館（千代田区）
- ・参加を希望される研究所員は、近くの運営委員または事務局にご連絡ください。

（文責：松田）

ルネサンス研究所発足に向けたメッセージ

コミュニズムよ、汝は今私たちのもとへとふたたび還ってきた。だが汝には、かつて汝が負わされた血と恐怖と汚辱の記憶が執拗にまとわりついているのだ。コミュニズムよ、汝はふたたび黒い犠牲の影を不吉にも私たちの冷たく凍える宿りの床へともたらそうとするのか、そのために還ってきたのか。いや、そうではあるまい、汝がもたらそうするのは、贈与と無所有と歓待と、そしてなによりもあふれるような生の歓びに満ちた未来の時間であるはずなのだから。だがアジアの果ての地のあらゆる場所、あらゆる歴史の欠片にまるで、まるではりめぐらされた地下茎の根のようにしがみついた暗い忍従と諦念の記憶が私たちを恐れさせるのだ、汝はふたたび現れた猛悪なく禍神まがつみなのではないか、と。コミュニズムよ、この暗く冷たい記憶にとどめをうつ真なる＜希望＞に向かって自らをして歩ましめよ、汝がわが未来の緑なす還帰の地にすでに家を建てあたたかい臥所を整え手を差し伸べているのだと証し立てよ、まちがってもあのユーラシアの白々とした訳知り顔の審問官の顔をする事なく。閃光のように歴史が切り裂かれ、その彼岸に幻の＜王国＞が垣間見える瞬間を汝が携え還って来たのだと大声で呼ばわれ。私たちははっきりと言いたいのだ、汝が戻るのをずっと待っていたのだと。

12月10日、劉暁波のノーベル平和賞受賞の日に、そしてロンドンの学生たちの英雄的な蜂起の報に接した日に

（ライブツィヒ在住：高橋順一）